

すくも
自主防災会だより
第2号

「数字の意味するもの」



南海トラフ巨大地震で起こりうる最大級の地震被害想定が公表されて久しくなりました。土佐清水市と黒潮町で最大34メートルの津波という内容で、県民の間に「対策をしても仕方ない」というあきらめのムードが漂うほどの衝撃的数字でした。しかし、この数字を聞いて我々が過剰反応するのは禁物です。「地震の切迫度」と「今回想定された超巨大地震・津波の発生確率」は全く別物であることを正しく理解し意識せねばなりません。今回の想定は、従来からの南海地震モデルに、現在の科学的知見の範囲で考えられる

あらゆる災害被害要因を反映させてはじき出した数字であって、今後の1000年の内に、計算上ありうるというものであり、簡単に言えば「その発生確率は極めて低い」ということを意味しているのです。一方、南海トラフに震源域が連なる東海・東南海・南海地震は、すでに誰もが承知しているとおおり、30年以内の発生確率がそれぞれ88%、70%程度、60%程度と予測されており「切迫度は相当高い」ことを示しています。

ちょっと過去のデータを振り返ってみましょう。日本列島に大きな被害をもたらす地震のほとんどはマグニチュード8クラス海溝型地震と7クラスの内陸直下型地震であることは過去のデータ分析で分かっています。激震に抗する「耐震化」と、津波から「早く高く逃げる」という通常モードの地震に対する現実的対策がしっかり定着されておれば、前述の「可能性として極めて低い今後100年に1度の超巨大地震」

なデータが残されており、つまり、自宅が高台にあつても昼間は沿岸部で働いたりしている。そうした状況のなかで本当にタイムミスを失わず逃げられるかということ。忘れてならないのは、避難場所や避難経路ができ、高台移転しても、津波に襲われた時にいる生活圏内不特定の場合で、安全確実に避難行動がとれなければ、人は命を落とすということ。そのためには「津波は30センチで人を流し、1メートルで家を押し流す」ということをしっかりと認識しておくことが大切です。津波が30センチであっても30メートルであっても、避難せねばならないという切迫性において何ら変わりがないことをしっかりと肝に銘じようではありませんか。

災害対応で見落とされがちで、かつ最も重要なものが防災意識の向上というソフト面であることは論を待ちません。東日本大震災で「避難意識はあつたが、今が避難するその時だ」との意識を持てなかった」との話を耳にしました。万里の長城と称され、日本一の巨大な防潮堤が二重に構築されているから安全であるといった一種の過信が、避難の遅れを招き多くの犠牲者を生んだ宮古市の事例にも学ぶべき多くの教訓がありました。防災意識の向上に即効の万能薬はありません。油断を戒め一定の緊張感を持ち続けることは意外と難しいもののように。

この両者を混同して「マグニチュード9クラスの超巨大地震が切迫している」と勘違いして、無力感に陥ってしまうことは大変危険です。かえって地震防災の支障にもなり兼ねないのです。大切なことは、この衝撃的な被害想定を含めた諸データを、家庭や地域の防災・減災にどう生かしていくかということなのです。無力感に打ちひしがれている場合ではありません。

地震にせよ津波にせよ基本にあるのはやはり人々にどう危険回避行動や避難行動を意図させるかということ。堤防の整備や、避難場所の高台移転を講じたとしても、人々はそうした環境に甘え、挙句の果てには避難行動をとらなくなる傾向も指摘されます。

東日本大震災における釜石市では、事前想定で自宅が想定浸水域の外にあつた人が多く亡くなつており、危険と思われる地域に住んでいた人ほどよく逃げているという皮肉

災害に強い地域づくりを合言葉に、世代を超えて地道な取り組みを継続して参りましょう。



トラフ博士 ©やなせたかし



ゆうどうくん ©やなせたかし

(宿毛市自主防災会連絡協議会 役員代表 河野典生)

